

帝キネ声屋映畫

紹介

第百六十六號

立派な映畫劇である。單に監督者さか、會社さかを指摘してではなく、大きく日本映畫界に於ける近來稀に見る傑作と推賞する價値ある映畫である。福山正夫氏の原作は知らないが、映畫から受ける印象は實に素晴らしいものである。高原の温泉町に咲く可憐な乙女とその母にまつはる数奇な運命は見る者の胸に轟々と迫り、寸分の隙も與へぬ緊張感を最後まで保ち得て居る。勿論原作も優れて居るのであらうが、松本英一

氏の監督手法など全く完璧に近、鮮やかである。だるま茶屋の描寫、美代子と民雄の戀の描寫、醜と純深の對照を心行くまで明確に表現して我等を歡喜せしめた。俳優も又好く歌川八重子嬢のお千代等とても傑出したものである。酌婦となつてからの演技など千役の松本ナナ子嬢の可憐な助演と共に激賞すべきな躍躍しない、鈴木信子嬢の美代子と里見明氏の民雄は狭り役で美しく、このローマンスの人物にふさはしかつた。保田庸氏の撮影も監督や俳優に秀らぬ優秀で、この映畫を榮々させて居る。現在の日本映畫界の生んだ代表的映畫として諸君に一目を奨めて置く。(八月一日、東京遊樂館封切)

——山本綠葉——